

母と言葉

—アルペール・カミュの初期作品世界— (3)

鈴木忠士

はじめに

第1章 アルジェリアの母と息子

第2章 『苦悩』との出会い——〈読む〉から〈書く〉へ

第3章 『裏と表』論

I テキストの生成過程 …… (この節のみ第19巻第4号)

II 深層のテキスト

A 母のイメージと息子の母親に対する関係

…… (この項の、途中まで第20巻第2号、
途中から終りまで本号)

B 祖母のイメージ

C 父のイメージ

III 『魂のなかの死』と『生きることへの愛』

第4章 『幸福な死』論

第3章 『裏と表』論〔続〕

II 深層のテキスト

A 母のイメージと息子の母親に対する関係

テキスト-5

「母親」が暴漢に襲われて失神し、「息子」が彼女をみとって一夜添い寝をして過ごすというこの挿話は、古典的な精神分析論の絵解きとも見える。たとえば、コストの解釈はそのような観点からのものだ。「彼女は、一日の終

りには」から「すべての人々を向うにまわして孤立していた」までを引き、「この挿話を簡単に解釈」する、としてコストは次のように述べる。「カミュの母親が犠牲者となっている攻撃は、そのサディスティックな様相だけで、彼の両親間の性的行為を表わすものとして、すなわち原光景として、年若いカミュに空想される。しかし、攻撃者は、その罪を負うことを拒んで、逃走した。そして、息子がまた母親と同じベッドに就く。彼が罪を担うこととなるのだ。[攻撃者への同一化——原著者注] あたかも、彼、つまりアルペール・カミュが、自分の母親を攻撃し、次いでその自由を奪って、自分と一緒に『夜具の上にじかに』寝かせたのであるかのように、すべてのことが運んでいく。そこに、『彼らとその夜どれほど孤立していたか』に思いをはせるときのカミュの深い感動が由来するのだ。そこに、とりわけ、彼が身のうちにこみ上げてくるのを感じる、状況が彼に担わせた強烈な罪責意識に根差す、奇妙な感覚が由来するのだ。〈この私が母の寵愛〔愛の証〕を享けているのだから、きっと、この私に攻撃の責任があるのに違いない〉、少なくとも、このようにカミュの無意識は理解しているのである。そこに、汗と熱、そしてこの夜突然現われたあの特権的な瞬間——カミュが知ったおそらく最初のそれ——が由来するのである。[強調は原著者] さらにコストは、「世界は崩壊してしまっていた」から「彼〔カミュ——原著者注〕は生きていたのだ」までを引きつつ、「明らかに、ここでは離人症の発作が問題になっているのである」と述べている¹⁴⁾。

精神分析の古典的図式への批判が欠けていること、文学作品のテキストが精神分析理論を例証する資料としてしか扱われていないこと、「彼」と「彼女」を無媒介にカミュとその母に同一視していること、そうした、文学作品を解釈する上での方法上の問題、さらに、「離人症」は分裂病像ないし「スキゾイド的構造」の特徴であるとし、分裂病像ないし「スキゾイド的構造」を範型としてカミュ文学を解釈していること、これらの問題点については別稿で詳しく論じておいたので¹⁵⁾、ここでは立ち入らぬでおく。

ただ、「原光景」は幼児が抱く「無意識的幻想」¹⁶⁾であって、このテキストの「彼」は「もう大きくなっていた」のだから、コストの解釈にそうとしても、「母」が暴行されるというこの話は、「彼」の「原光景」という「無意識的幻想」を活性化するものであったと言うべきであろう。そして、この「原光景のなかにあられるのは、実際に体験した事件の記憶」と「一つの純粋な幻想」との「二つの境界の間に位置している」のだが、「両親の性行為に関して子供がもつ理解と関心は、子供自身が、母親との間にもった前エディプスの身体的経験と、その経験からくる欲望とに支えられている」¹⁷⁾と言われていることに注意を促しておこう。拙論の観点からすれば、むしろこの、「子供自身が、母親との間にもった前エディプスの身体的経験と、その経験からくる欲望」の如何が第一義的な問題となる。そして、そこで問われる「無意識的幻想」は、両親の性行為の場面を主たる内容とする「原光景」ではなく、それと「サディスティックな様相」を共有するが、もっぱら母と子の被害・迫害妄想的な双対関係を内容とする原・体験なのである。以下は、こうした観点からするテキスト-5への解釈の試みである。

テキスト-5の状況設定と主要なモチーフには、先のテキスト-4のそれと似通ったところが数多く認められる。いずれの場合にも、「母親」は「宵闇」に閉ざされていく部屋のなかで、たったひとり、「床の溝」や窓外の光景を「我を忘れて何とはなく眺め入っている」のであり、そこへ、一方は「学校」帰りの「子供」が、他方は「もう大きくなっている」「息子」が他所からやってくるのである。そして、一方での「母親」は「動物的な沈黙」を守り、「子供」の「たてる物音が聞こえない」、それから「跳び上がった。怖かったのだ。」他方での「母親」もまた、動物のように「もがき、うめき、時として不意に跳び起き」、「怯えた唸り声」を出す。「気を失ってしまった」彼女には、もちろん「息子」のたてる物音は聞こえない。さらに、一方の「子供」は母に対して「自分を他人〔^{エトランジェ}異邦の者〕と感」じ、それとともに「母親への愛がどっと溢れ出すのを感じ」るのだが、他方の「息子」も、「疎外感^{アベイゼ}

〔異郷での違和感〕を覚えるとともに、「自分の母に彼を結びつけている絆を感じとった」のである。そしてまた、一方においては、母と子の「愛」を妨げる第三者として「老婆」＝「祖母」がおり、他方においては、母と息子の「絆」に敵対するものとして「他人ども」がある。

一方においては、母と子の「沈黙」が、「石油ランプの丸い輪、防水の食卓掛け、叫び声、野卑な言葉」から成る「生活」をと絶えさせて、「ひとつの時の絶え間、無量の瞬間を表わしている」とされ、他方においても、「大いなる沈黙の園」のなかで、「勉強とか野心」や「食堂の好みとか好きな色」などによって成る「生活」が杜絶し、「世界が崩壊してしまっていた」と語られているのである。

このように多くの共通点をもつ二つのテキストには、共通の淵源、いわば原-テキストを想定して、両者はそこから派生した二つのヴァリエーションをなすものと見なすこともできるだろう。そして、テキスト-4では「子供」のときのことが、テキスト-5では「もう大きくなって」る「息子」のことが語られているのだが、「母親」の「脳震盪」と「死」のおそれという危機的な状況のもとで、テキスト-4ではなお潜在的であったものが、テキスト-5では活性化し、より深刻な表われをもって顕在化していると考えることができよう。つまり、「彼」の成長段階や物語の順序とは逆に、テキスト-4よりテキスト-5のほうがより根源的であり、原-テキストにより近いヴァリエーションなのである。

テキスト-4からテキスト-5へと読み進めたとき、以上述べたような両者間の相似からして、また前節I「テキストの生成過程」の(1)「形式」の項で述べたように、「子供」も「息子」も語り手「僕」の分身であるほかないことからしても、読者の眼には、「子供」の残像に「息子」の姿が、ごく自然に重なって見えてくるはずだ。さらに、暴漢の「男」が消えると、それにとって代るように「息子」が登場することから、読者の脳裏において、暗々裡にも、「男」の姿に「息子」のそれがオーバーラップすることもありうるだ

ろう。先のコストの解釈は、そうした見方のひとつの例である。

もし「男」＝「息子」という直観的判断が正しいとするなら、コストの言うように、「男」の振舞いには「子供」＝「息子」の潜在的な願望が仮託されているのであり、その間接的な実現なのだということになる。しかし、この潜在的な願望の中身如何のところ、コストの解釈と拙論は袂を分つのである。

私は先のテキスト-4の分析において、「子供」の「母親」に向ける潜在的な甘え、恨み・敵意の存在を指摘しておいた。そして、その原因は、「母親」からの「愛撫」の欠如、「子供」の「母親への愛」の表出に対する「母親」の側からの「答え〔応答〕」の不在にあるとしたのだった。母に「遺棄」された幼児は、「母親への愛」を憎しみと敵意にかえ、空想裡に母親を殺害しさえするのだが、同時にまた、そうした敵意・殺意は投影されて、母が幼児の自分を攻撃し、とり殺そうとしていると見える。この被害・迫害妄想的な原-遺棄という、「実際に体験した事件」と「純粋な幻想」との「二つの境界の間に位置している」無意識的幻想が、「男」に暴行をうけて「母親」が「脳震盪」を起こすという事件を契機として¹⁸⁾、再び「息子」の心中において活性化したのではないか。

「男」が「息子」自身の潜在的な願望を実現したのであるなら、「息子」は「男」と自分を無意識裡に同一視し、「男」の所業を自分自身のそれと見なすだろう。「先ほどの恐怖」が「部屋のなかに残っていた」として、辺りの兇々しい雰囲気は、「事件」の余波とされているのだが、この闇のなかになお潜み、「息子」をも「怯」やかしていると見える敵意は、実は彼自身のそれなのだ。幼児期の「万能感と魔術」¹⁹⁾が支配する原-遺棄の無意識的幻想にあっては、敵意もまた際限を知らないものとなる。この敵意が外界に投影されているからこそ、「すべての人々を向うにまわして孤立」することになる。そして、「世界」が敵対してくる。原-遺棄の幻想世界にあっては、敵対する母はまた即世界なのでもあるから。

その「世界」もまた「崩壊」の危機にある。母即世界である「母親」が「病」にあり「死」に瀕しているのだから。より正確に言えば、「幻想」としてまず「崩れ落ちてゆく」のは、現実の「生活」であり、現実の「世界」である。むしろ現実として残るのは、母即世界としての限りでの「世界」であり、母と子「ふたり一緒の」原初の双対関係である。この「世界」も「崩れ落ちてゆく」き、「病と死」に還元され、「息子」もそこに「陥って」ゆく。なぜなら、母即世界の「幻想」においては、母の「病と死」は即子の「病と死」と感得されるからであり、母の「病と死」を招いた自らの殺意にまで至る敵意を罰するには、同じ「病と死」に自ら「陥って」ゆくほかないからであり、原 - 遺棄における制約を知らない敵意と相即的な、母子一体への際限のない渴望を、「ふたり一緒」の「病と死」のなかで、いわば負の方向で充たすことができようからである。

「ところが、世界が崩れ落ちてゆくそのときにすら、彼は生きていたのだ。そして、ついには眠り込んでしまいさえたのだった。」ちょうど幼児が、原 - 遺棄の葛藤のただ中においてすら、その身に備わる自己保存の本能によって、「生き」かつ「眠り込んでしまいさえ」するように。

したがって、「まやかし」なく見るなら、「ふたり一緒の孤独〔強調は鈴木、以下同じ〕」とは、その実「ふたり」別々の「孤独」なのであって、だからこそ「絶望的」と形容されているのである。「彼ら」の「孤立」は、まず「彼」自身の、「母親」の傍らにありながらの孤立なのである。テキスト-4での「母親への愛」が、「他人」にとどまりつづける「母親」に向けてのものであったと同様に、「息子」が「感じとった」という「自分の母に彼を結びつけている絆」とは、彼の生得のエロスの飛翔力が虚空に描いた対岸を定めぬ懸橋にすぎない。だからこそ、「彼の心への測り知れぬ憐愍」が語られる。テキスト-4の分析で明らかにしたように、「母親」への「憐れ」みに先立って、遺棄されている「子供」の自分自身への「憐愍」があるのだ。そして、この自己憐愍が「まやかし」の「老女」を自分の「身のまわりに」想い描か

せる。それは、充たされぬ潜在的な甘え、母子一体化への願望が、「崩壊」した「世界」の跡に「展^{ひら}げるマーマの帳、身代りの保護的空間なのである。

さて、なるほど「世界」の「崩壊」が語られ、「現実との接触の喪失」²⁰⁾とも呼ぶような事態が語られてはいるのだが、コストのように、この「離人症」様の心理状態を、分裂病、あるいは「スキゾイド的な構造」が支配的な心性に特有のものとするのは早計というものだろう。なぜなら、世界崩壊の「そのときにすら」「生き」、「眠り込んでしまいさえた」という確かな身体感覚、そしてたとえ「絶望的」なものにしる「優に優しいイメージ」を胸底に育みうるだけのエロスの能力からすれば、彼にも「原初的エロス状態」(森山)の体験はあって、その記憶痕跡、「エングラム」²¹⁾が身に備わっていると考えられるからである。この、いわば根源的エロスの体験のエングラムに基づくエロスの飛翔力によって、原-遺棄における被害・迫害妄想的な母即世界もその被害・迫害の色合いをぬぐい去られ、「あの奇妙な母親の無関心！ その大いさと見合うものと僕に見えるのは、世界の測り知れない静寂^{ソリチュード}〔孤独〕しかない」という心象形成が可能となったのであり、「他人」同士の敵意に充ちた「孤立」が、「ふたり一緒の孤独」と表象されえたのである。

「病と死」に「陥っている」という「彼」の「眠り」は、「死」に至る「眠り」、死の眠りなのであろうか。「世界」が「崩壊」し、「人間たちに源をもつ我々の希望のすべて」が、「生活〔人生〕」が「くり返される〔新たに甦^{よみがえ}る〕という幻想」がついて去った今、残るのは「すべてが虚ろ」な「大いなる沈黙の園」。「死」の「園」しかないと見える。だが、「そのときにすら」、「生き」そして「眠り込」む、いわば身体そのものに還元された人間の在り様とは、新生児のそれを思わせるものではないだろうか。母親の「怯えた唸り声が生ずる大いなる沈黙の園」とは、産褥のことでもありうるのではないか。だからこそ、「息子」は「母親」と「同じベッドの上で彼女と身体を並べて」いるのであり、「汗と酔の混じり合ったこの匂い」、そして彼らを「結

びつけている絆」が語られているのではないか。

そうとすれば、この「病と死」のさなかの「眠り」は、「新たに甦る」^{グイ}「生」の、再生の眠りでもありうるだろう。負の方向における「生」の原初の形態に「陥った」まさに「そのときに」、^ナ「彼」は正の方向における「生」の原初の形態に立ち返るのだ。そして再びまた、身に備わるエロスの飛翔力によって、「絆」を^な縋いなおし、「老女〔母〕の役割を演じ」うるものを「身のまわりに^{ひろ}展」げること、^ナ「希望」と「生活」と「世界」を「新たに甦」らせることに成功するのである。この母即世界の「崩壊」・「死」、それと相即的な自己の崩壊・死、そして母即世界の「甦」り、それと相即的な自己の再生、この往復運動は、カミュ文学の個々の作品においても、また生涯の作品を通じて、基本的なリズムを構成している。そしておそらくは、カミュその人の人生においても。

さて、「世界が崩壊してしまっていた」から「ところが」までのテキストの異文として、次のような手稿断片が残っている。

「世界は崩壊してしまっていた。そして、世界と一緒に、始まりと終りの幻想も。本当に、もう何も存在していなかった、彼の勉学も、彼の野心も、彼が〔一語判読不能〕築いてきた価値の体系も。豆ランプの灯芯の明りで、この部屋の空間は気まぐれに変わるように見えた。右左はその意味を失っていた。自分が陥っていると彼には感じられる、病と不幸だけが残っていた。そして、とどのつまりは、死だ。とりわけ、どんな欲望よりも怖るべき、疑惑だ、むしろ、人間の心に突き刺さっているそれだ〔この（そして）以下の最終一行は線を引いて消してある〕。ところが……〔〔 〕内は原編者注〕²²⁾

決定稿と比べてみると、むしろこの手稿断片のほうに「離人症」様の体験の記述を思わせるところがある。「右左」の「意味」の喪失、「不幸」の意識、そして、線で削除されてはいるのだが、「とりわけ」で「疑惑」の存在が、そうした印象を強めている。離人体験の根本には、「世界」に対する基

本的信頼の欠如があると言われているからである。だが、そのことは、決定稿のテキストが示す心的世界の構造を分裂病的ないし「スキゾイド的」であるとするコスト説の正当性を証すものであるのだろうか。もしそうなら、決定稿での「ところが」以下の「生き」そして「眠り込」む行為は、身体と精神の乖離、自我の分裂を示すものであるか、あるいは自我の解体を回避するための身体への絶対的な引きこもりと解されるのでもあろう。だが、仮に決定稿の当該箇所を手稿断片に差し替えたテキストを想定してみても、「ところが」以下に分裂病的ないし「スキゾイド的」心性の証を見出すことはできないだろう。「ところが」という対立の接続詞を境に、依然としてひとつの方向転換、転調が起きている。前には、「疎外感」・「世界」の「崩壊」・「病と不幸」・「死」・「疑惑」が、後には、「生」・「ふたり一緒の孤独」・「絆」がある。端的に言えば、死と再生が対置されている。この転回を可能ならしめるものは、決定稿のままの場合と同じく、やはり自己保存の本能と、それを正常に機能させるに足る、そして負の状況を正の状況へと変容させるに足る、「原初的エロス状態」の体験の「エンGRAM」に根差すエロスの飛翔力であるだろう。

それでは、なぜ手稿断片は決定稿のように変えられたのか。手稿断片を決定稿の当該箇所と比べてみると、前者にあった空間知覚の異常、「不幸」の意識と「疑惑」が、後者ではなくなっていることに気付く。これら削除されたところこそが、すでに述べたように、手稿断片を離人体験の記述を思わせるものになっているのである。つまり、決定稿の場合、少なくともテキストの表層においては、事実として「病と死」のうちにあるのはあくまでも「母親」であって、「息子」がそこに「陥っ」たのは、「母親」への同一化の結果であるにとどまる。だが、手稿断片の場合には、「息子」自身の心身の破綻があらわに記述されていて、むしろ「息子」の側における精神の「病」の存在が疑われかねない。「不幸」と「疑惑」の言葉はまた、「母に彼を結びつけている絆」の実相について、それこそ読者の疑惑を喚び起こすことになった

であろう。結局、先に述べた「ところが」を挟んでの転回は、決定稿の場合のほうが、はるかに円滑に行われるものになっていると言える。

現実のもたらす相矛盾する生々しい素材を、取捨選択し、変容させて、ひとつの文学作品のテキストに統合していくという意識的かつ無意識的な工程は、すなわちテキスト生成の過程は、カミュの場合には、苦渋に充ちたものようであった。そうした過程の産物が、玉石混淆、あるいは半ば研磨され半ば原石のままという状態にある草稿群であり、その端的な例が「『肯定と否定との間』のための草稿断片」である。それを見ると、決定稿での「ふたり一緒の孤独」が、もともとは、ふたり別々の孤独であったことが分る。そして、後者でありつつも前者でもありうるような「孤独」のあり方が摸索されているのだが、その苦渋に充ちた変容への努力の過程をたどることができるのである。

「……」

いまひとつ、彼には決して説明のつけられなかったことがあったが、それは息子である彼がかなり重い病気に患ったときの、彼の母親の奇妙な態度である。大量の吐血という、この病の最初の徴候が現われたとき、彼女はほとんど恐れを示さなかった。彼女は確かに気懸りな様子をしはした——けれども、それは普通の感受性をもつ人が近親者のひとりを苦しめている頭痛に対して示す気懸りであった。ところが彼は、彼女が驚くべき感じやすさを備えていることを知っていたし、他方では、彼女が彼に深い情愛をもっていることを知っていた。「……」他人が彼に言うには、彼女の泣いているところを見たということだ。しかし、これまでのところ、そうした涙には、彼はさしたる信を置けないのだった。とはいえ、彼女は彼の病の重さを知らないわけではなかった。だが、彼女はそんなふうに彼女のいつもの驚くべき無関心で通しているのだった。よく考えてみると、その上もっと驚くべきことは、彼がそのことで彼女を責めようとは思わなかったことである。暗黙の了解が彼らを結びつけていたのだ。そして彼自身、彼

の母親が病気になったとき、さしたる危惧を覚えなかったことを思い出すのだった。

このふたりの人間の間には、死というものがもつ窺い知れぬ深みのすべてを生み出しているあの感情が存在しているように思われた。そして、あまりによく愛情ととり違えられる、優しさ・感動・過去の三点セットではなくて、そうした感情の深い意味を成しているものが存在しているように思われた。どんな沈黙も損いえないほどに強烈な愛着が…… [このセンテンスの後続部分はほとんど理解不能である。]

彼はまた、時として彼らの眼差しが行き交う折りには、もっと貴重な(?)何かを彼らを結びつけていほしないか、と自身に問うことがあった。もし、一方での、この教養があり活動的な男と、他方での、耳が聞こえず、二言三言以上には言葉を交わすことができない、とりわけほんの少しでも物を考えることができない、それに文盲の、この女とをとっくりと見比べれば、彼らの関係が、お早うとおやすみの世界を超えることができると思うのは、ためられるのだ。ところが、あるひとつのことが彼に強い感銘を与えていたのである。彼には、自分が死ぬことはありえないという気がいつもしていたのだった。哲学者たちの言うあの不死という [二語判読不能] 気がするということではなかった。自然的な死を問題にしていたのだ。 [……]

彼はこれまで、母親が死にはしないかと恐れたことは一度もなかった。そんなふうには彼は彼自身の無関心を説明していた。そして、母親の眼差しのうちにも同じ確信を彼は読みとっていたのだと言わねばならぬ。彼女は共同の永生という考えを無意識裡に抱いていたのだ。彼女はいつかふたりを別れさせる何かがありうることを疑問に思っていた。彼女は疑いさえしていなかった。彼女はそんなことは考えもしなかったのだ。

この奇妙な絆は彼を深く驚かせた。 [……] [() 内と [] 内は、省略を除き、原編者注]²³⁾

このテキストの語り手は、ひとりの「息子」とその「母親」との関係について、「説明のつけられなかったこと」になんとか「説明」をつけようと苦心惨憺している。「けれども」・「しかし」・「とはいへ」・「だが」・「ところが」、と対立の接続詞が頻用されているところに、異質な要素、矛盾との衝突の多さが、文学テキスト形成に向けて「秩序付け」(グル=エ)、統合することの困難さが、よく窺えよう。

「説明のつけられなかったこと」とは、「息子」の生命が危険に瀕しているときに、あらわに見てとられた「彼女〔母親〕のいつもの驚くべき無関心」と、他方での、彼女の「驚くべき感じやすさ」、彼女が「彼に深い情愛をもっていること」との間の矛盾である。

テキストが一方で提示していると見える現実を「息子」が容認しさえすれば、「説明」は簡単につけられたであろう。現実とは、「母親」の「感じやすさ」が、「深い情愛」のもつ繊細さや敏感さを意味しているのではなく、単なる情動興奮の起こりやすさ、激しやすさを意味しているにすぎないこと、そして、彼女は「お早うとおやすみの世界」に安んじているのであること、およそ「息子」にかかわることは「考えもしなかった」のであり、それゆえの「彼女のいつもの驚くべき無関心」があるのだということである。「息子」はこれを受け容れることができない。彼には、母親が「彼に深い情愛をもっている」という確信がある。言い換えれば、そうした確信が彼にはどうしても必要なのだ。そこで、いわば生き「別れ」の状態にある母と息子の「ふたりの人間の間」になんとか「絆」を見出そうとする。まず、「ふたり」が似ているということ、それも「奇妙な〔特異な〕」特徴を分ちもつことによって「他の人たち」²⁴⁾を排除する形で瓜二つであることのうちに。「息子」は、彼の病気に際しての「母親」の「無関心」に対応するものとして、「母親」が「病気」になったときの自身の平静さを「思い出す」のだ。また彼は、自分が「自然的な死」を死ぬことはないという「気がしていた」と同様に、「他の人たちの死については鋭い、苦痛に充ちた意識」をもっているのにも

かかわらず、「母親」は「例外」²⁵⁾であって、彼女もまた「自然的な死」を死ぬことはないし、彼女も彼と「同じ確信」を抱いているのだ、と「説明」する。つまり、「死」に対する「共同」の「無関心」のうちに、「息子」は「母親」との「奇妙な絆」を確認するのだ。

次いで、このように排他的なまでに相似た「ふたりの人間の間」に、「優しさ・感動・過去の三点セット」から成る通俗の「愛情」とは異なった、互いの「無関心」を許容し、むしろそれを特権的なしるしとするような、そんな「絆」のあり方「あるひとつの愛の形」²⁶⁾、が摸索される。そこで、「無関心」は「^{ユマ・アンダント・クシット}暗黙の了解〔以心伝心〕」を、「どんな沈黙も損いえないほどに強烈な愛着」を秘めたものと解されることになる。つまり、それは「^{アーン・ドール・アン・ディ・フ・エランス}優しい〔情愛に充ちた〕無関心」²⁷⁾であるというわけだ。

「他の人たち」の迎える「自然的な死」でもなければ、「哲学者たち」の説く「不死」でもないという、「自然的な」限りでの「共同の永生」は、先に見たテキスト-5の、「ふたり一緒にの孤独」、「他人ども」や「すべての人々を向うにまわし」た上での、ふたりだけの「孤立」と、構造が相似である。ここで言えることは、第一に、このような互いの「^{アン・ディ・フ・エランス}無関心」を「^{アン・ディ・フ・エランス}非-差異」の証として、そのなかで「他の人たち」を排除する閉ざされた系を成し、外からは窺い知れぬ「暗黙の了解」を以て母と子を「結びつけている」ような「絆」とは、いわば想像上のへその緒であり、原初の母と子の、「自然的な」双対関係への回帰をめざすものだということである。言葉以前の関係に倣おうとするものだからこそ、「お早ようとおやすみを超えること」のない、「どんな沈黙も損いえないほどに強烈な^{アツツシユマン}愛着〔結びつき〕」と言われているのである。この未だ「差異」を知らない母子未分の、「原初的エロス状態」は「無意識」の世界であって、そこに「死」というものはない。「自然的な」生としての「^{ベレニテ}共同の永生〔永続〕」があるばかりなのである。

第二に言えることは、ここで問題にしている想像上の母子一体の系は、「他の人たち」を異物・敵対者として排除する世界であり、互いの内なる潜

在的敵意を外に投影することで「ふたりの人間の間」の「差異」を相-殺し、そこで初めて「非-差異」が可能となるような性質のものなのだとしたことである。そこに、「死」を知らぬ「原初的エロス状態」のなかの「絆」にもたとえられよう「強烈な愛着」が、「死のもつ窺い知れぬ深みのすべてを生み出しているあの感情」と呼ばれて、「死」が想起されている理由がある。また、そこに、「奇妙な」という異界のものとし、死のおぞましさを帯びたしるしが、「母親」の「無関心」ばかりか、母と子の「絆」にも、つまりはその「共同の永生」にも刻印されよう理由があるのだ。パンゴーが言うとおりの、この「神話的な永生は死と見紛うほどよく似ている」²⁸⁾のである。

『肯定と否定との間』のための草稿断片が、「ある晩、ほんの子供のとき、彼は彼女〔母親〕が暗闇のなかで、床板を異様に凝視しているところにぶつかったのだった」²⁹⁾という件——^{くだり}テキスト-4の先駆形のひとつと考えられる——を除いて、推敲されることもなく、決定稿から除かれたのはなぜか。自伝的（と思われる）事実が^{なま}生のままで書き連ねてあって、雑然とし、未整理であること、これは一目瞭然である。しかし、それだけなら推敲され、組み込まれていたはずだ。

「草稿断片」を構成している挿話群が提示する「母親」像は、「耳が聞こえず、二言三言以上には言葉を交わすことができない、とりわけほんの少しでも物を考えることができない、それに文盲の」女である。また、「息子」の「病の重さを知」りながら、その「感じやすさ〔激しやすさ〕」にもかかわらず、「いつもの驚くべき無関心」を保っている。このような「^{サンギユリエール}奇妙な〔特異な〕」「母親」像は、先にテキスト-1の項で述べておいたように（pp.46-47）、異常とか病的とかいった印象を与えてしまうおそれがある。あるいは少なくとも、「^{サンギユリエール}唯一の」存在、「例外」と見なされてしまうおそれがある。

他方、「息子」は「教養があり活動的な男」であるとされている。それは、先に見た「母親」像からすれば、対照が際立ちすぎて、「例外」者としての

母親像を強調するばかりであるだろう。また、「息子」が「大量の吐血」を伴う「かなり重い病に患った」とすることは、「息子」の言動が病的な、あるいは「例外」的なものであるという予断を導きかねない。そして、このような「母親」と「息子」の「奇妙な絆」もまた、「^{サンギュリエ}唯一の」、「例外」的なものと受けとられるおそれがあるだろう。

「草稿断片」が省かれたもうひとつの理由は、未来に投射された「原初的エロス状態」とも言える「共同の永生」への「確信」ないし、「息子」にとっては必須で必死の幻想と、他方でのやはりどこまでも「息子」には「奇妙」と映らざるをえないはずの「母親」の「無関心」、言い換えれば、結局「ふたりを別れさせる」別々の孤立と、「別れ」別れの「自然的な死」という現実の認識、この二つの拮抗する傾向が統合されえないまま、テキストを破綻させているからなのである。

テキスト-6

テキストの冒頭で、[・]語りの方法についての、文学作品のテキスト形成の方法についての明瞭な自覚が、簡明に述べられている。すなわち、対立する要素を雑然と「採り集める」ことで統合に失敗しテキストを破綻させるのではなく、矛盾を、いわばかっこに入れて扱おうような視点、対立する要素の「合い間」に位置するような視座を確立することで、「ひとつのイメージ」の形成が可能となると言うのである。では、どのようなテキストができあがっているのか。

「ところでと、ママ」と口を切って、沈黙を破るのは、ここでも「息子」だ。だが、再び沈黙に落ちこむのも、「彼女に話しかけたことは一度もなかった」とまで言われている「息子」のほうなのである。「母親」はといえば、言葉少なにはあるが、「息子」にあれこれと「話しかけ」てはいるし、「何か言いたかった」だけの理由で問いかけ、「そんなに喫ま^のないほうがいいのに」と「息子」の身体を心配し、せめて「時々は」会いたいと、遠回しにだ

が、「息子」に言いさえている。このような「母親」は、これまでのテキストのなかの、「あらゆることに無関心」な「無-思考」³⁰⁾な母、「耳が聞こえない」で「彼の言うことが分からない」、「頑なに沈黙」に陥っている母、「恐かった」ので「獣のように跳び上がった」、「驚くべき感じやすさ〔激しやすさ〕」を備えた母のいずれとも異なっている。また、「息子」のほうも、これまでのテキストに見られたような、母親の「奇妙な態度」を前にして「自分を他人と感じると、自分の苦しみを意識する」こともなければ、ふたり別々の孤独のなかで「ふたり一緒の孤独という絶望的で優に優しいイメージ」を育みながら「眠り」に落ちることもない。

確かにここでも、母と子の間では「黙っていても、事態は明らかになるのだ」と、「暗黙の了解」が言われてはいる。しかし、その一方で、「母親」は、間遠にはあるが「息子」に「何か」を語りつづけている。そして、「息子」のほうでも、その都度「ほんとだ」、「そのとおりだ」と、「母親」との一致を確かめている。つまりこのテキストの「母親」は、たとえここでも相変わらず「これまで一度も彼〔息子〕を愛撫したことはない」としても、言葉を通じて「愛撫する術」を知っているのだ。「また来るかい?」、これが母の息子への「愛」を「透明」かつ「単純」にそれとして示す言葉でなくなであろう。そうした「母親」の「愛」への「確信」こそが、「彼〔息子〕を部屋に引き留めている」のであり、「そのほうがいいのだ」と「確信」させているのである。

だが、このように「奇妙な」あるいはチグハグなところをぬぐい去られた、「透明さと単純さ」のフィルターを通過したものだけを「採り集め」て構成された「失われた楽園」の「ひとつのイメージ」も、仔細に見ればやはり、上澄みに対する沈澱物のようにして、「ふたりの人間の間」の違和の痕跡を残してもいるのである。たとえば、「息子」は「彼女〔母親〕のほうをほとんど見ず、のべつに煙草を吸っている」という。それは、「ふたりの人間の間」にしばしばふさがる「頑なに沈黙」、「母親」の「動物的な沈黙」に

対する苛立ちの身振りともとれる。「ところで」と口を切った「息子」が、「退屈してない？ 僕って、おしゃべりじゃない？」と気づかいを示すのは、自身が「退屈」していて、「おしゃべり」をしたいのだが、言葉が見つからないからなのではないだろうか。そして、そのような文脈からすれば、「母親」のほうも、「息子」が「まだ出掛けてもいないのに」ただ「何か言いたかっただけ」のためとして、「近いうちにまた来るかい？」と言うのは、互いの沈黙をなんとか破ろうとしてあがいている証ととれなくもない。

このような観点からテキスト-6とその異文を対照して見たとき、二つの箇所の異同が注目される。まず、決定稿で「彼が彼女に話しかけたことは一度もなかった」とあるところが、初版では、「彼が彼女におしゃべりだった〔沢山話しかけた〕ことは一度もなかった」³¹⁾となっていた。後者のほうが、文脈上は論理的である。前者が最終的に選ばれたのは、対話をリードしているのは「母親」で、「息子」のほうはほとんど合の手を入れるにとどまっているという、テキスト-6全体にわたっての役割設定を補強するものだからであるだろう。

もうひとつの異文は手稿で、決定稿からは除かれたのだが、そのなかで語り手の「私」は、ここで問題にしているのは別の情景を「思い出」しながら、次のように言っている。

「僕は、子供で、《僕は退屈だ》と飽きもせずにくり返し言いながら、暗い部屋から部屋へと遊んでいた。[二語判断不能]がいつもの物静かな声で答えた、《我慢おし。》と。黙っている、すると、沈黙が耐え難くなってきた。」³²⁾

この異文は、決定稿の「彼女は灯りをつけるために立ち上がった」の前に位置するはずであった。これが決定稿から削除された理由は容易に推察できよう。「母親」と「息子」を濃密で「確信」に充ちた「沈黙」が浸し、そこに時折り、しかし確かなゆったりとしたリズムで、数少ない言葉が交わされるといふ情景の途中で、やはり語り手の「僕」の分身であるほかない「子

供」が「沈黙」を「退屈」とし、「耐え難く」思う場面を挿入することは、「ひとつのイメージ」の形成を妨げ、それと矛盾する別のイメージをもたらすことになったであろうからだ。

また、テキスト-5で引いた「『肯定と否定との間』の草稿断片」のなかの、途中省略とした箇所のひとつでは、決定稿とは逆に、病気の息子を母親が見舞いに來た場面が、次のように描かれている。

「《よくなったね》、《うん》彼女〔母親〕はそこで黙る。そして、顔をつき合わせ、ふたりとも、何か言うべきことを見つけようとする努力で、精根を使い果してしまうのだった。」³³⁾

ここでは、「ふたりの人間の間」の「沈黙」は、「暗黙の了解」などではなくて、まさに「耐え難」いもの、地獄なのである。

さて、以上の比較検討から、ひとまず次のような結論を導き出すことができよう。すなわち、草稿（と初版）から決定稿（と決定版）に至る過程で起きていることは、単にモチーフの整理とか文章の練り直しといった意味での推敲にとどまるものではない。両者の段階を根本的に分つものは、文学作品のテキスト形成についての方法的自覚の有無である。「生活〔人生〕」が時に応じて示す地獄と「楽園」のそれぞれの相を、その都度、それぞれの事実に応じて言葉で再現的に書きとめようと図るなら、その傍らでまた、地獄あるいは「楽園」の「幻想」を衝動的に語ろうとするなら、テキストは異質な断片の、玉石混淆の無秩序な集積にとどまるほかない。地獄と「楽園」の「合間」に視座を保って、そこから見えてくる双方の「透明」で「単純」な形だけを「採り集め」ることで、地獄をも孕む「楽園」の、あるいは地獄とも「楽園」ともつかぬ世界の「ひとつのイメージ」を形成すべく努めること、そこで初めて文学作品のテキストの生成が可能となるのだという方法的自覚、これこそが草稿と決定稿を分つ質的変容をもたらしたものであったのだ。

こうして、後年カミュが『裏と表』の再刊にあたって新たに付した「序

文」のなかでの次のような言葉が、少なくともカミュ文学については、いかに正鵠を射たものであったかが、よく理解されることとなる。カミュは言っていたのだ、「芸術作品」は「私〔カミュ〕の底深い無政府状態」、その「魂の奥底の見えざる諸力をまず使わなければならない」が、それは「それら〔諸力〕を水路に導き」、「それらの波が高く上がるように、堤防で囲んだ上で」のことである。そして、「私が現にあるがままの自分と、私が言うこととの間に均^{エキリアブル}衡ができる」ことが、「我々にとって一番大事な秘密」に「形式^{フォーム}を、それら〔秘密〕の声を響かせることを止めずに、与えること、ほぼ均等な分量で、自然なものと^{アール}技芸とを結合させる術を心得ること」、これこそが、作家自身が「存在」することであり、「作品をつくり上げること」³⁴⁾なのである、と。

(この項終り)

〔注〕

- 14) Alain Costes: *Albert Camus et la Parole manquante, étude psychanalytique*, 1973, Payot, pp. 71-72.
- 15) 拙著『憂いと昂揚』, 1991, 雁思社, pp. 424-432, 437-450 のコスト説に関するところ。
- 16)-17) ラブランシュ/ポンタリス『精神分析用語辞典』(1973/1976), 村上仁監訳, 1977, みすず書房, p. 103.
- 18) ついでだが、「^{ユル・セリユーズ・コモシオン・セレブラル}重度の脳震盪」は、「極度の恐怖」によって惹き起こされたとされていて、「^{コグニチオン}精神的衝撃」によるものようであるが、それは作者アルベール・カミュの母がその夫の死の報に接した際に受けた「ショック」とそれゆえの「心理的外傷」(H. R. ロットマン『伝記 アルベール・カミュ』, 大久保敏彦・石崎晴己訳, 1982, 清水弘文堂, p. 20.)を想起させる。息子のアルベールも、母の「頑なな沈黙」のよってきたる原因を、周囲の人たち、たとえば叔母のアントワネットの口から聞き知っていたのかもしれない。
- 19) H. スィーガル『メラニー・クライン入門』(1973), 岩崎徹也訳, 1977, 岩崎学術出版社, p. 140.
- 20) Costes, *op. cit.*, p. 75.
- 21) E. ジェイコブソン『自己と対象世界』(1964), 伊藤洸訳, 1981, 岩崎学術出版社, p. 33.

- 22) Albert Camus: *Essais*, 1965, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, p. 1190, n. de p. 27.
- 23) *Ibid.*, pp. 1214-1215.
- 24)-25) *Ibid.*, p. 1215.
- 26) Albert Camus: *L'envers et l'endroit*, 1958, Gallimard, p. 31.
- 27) Albert Camus: *L'Etranger*, 1942, Gallimard, p. 171.
- 28) Bernard Pingaud: *L'Etranger de Camus*, 1971, Hachette, p. 76.
- 29)-30) Albert Camus: *Les Essais*, p. 1215.
- 31) *Ibid.*, p. 1190, n. 1 de p. 29.
- 32) *Ibid.*, p. 1190, n. 2 de p. 29.
- 33) *Ibid.*, p. 1214.
- 34) Albert Camus: *L'envers et l'endroit*, pp. 30-31.